第四回　丸山眞男文庫記念講演会要旨

一九三〇年代の恐怖の持続

鶴見俊輔

一九三〇年代・戦中の恐怖

「思想史の中で自分の嫌いなものにあったらどうするんです」と、私は丸山さんに聞いたことがある。晩年の傑作「闇斎学と闇斎学派」を書いている時に、吐き気がひどくって救急車で入院したというのが答えだった。丸山眞男の中に自分が通った一九三〇年代の不快感が呼び覚まされたんです。

丸山さんは大正デモクラシーの流れの中で、その代表者の一人・新聞記者丸山幹治の子として育ち、父の同僚長谷川如是閑と中学生の頃から往き来していた。一高二年生の時、唯物論研究会の講演会でその如是閑が話すのを知って聞きに行ったら、警察に捕まって留置場に放り込まれた。これは十九歳の少年にとっては大変なショックです。しかも一遍捕まった人間は後々まで特高（特別高等警察）や憲兵にマークされるから、東大に入り、助手・助教授になり、陸軍にとられてもその恐怖は去らなかったと思います。

東大法学部の助手になって、「東洋政治思想史」の講義を担当することになった。助手の間は講義を持てないので、早稲田の津田左右吉を招いて講義をしてもらった。津田さんはずっと右翼から攻撃されていたから、東大での講義にも右翼の学生が入り込んで、津田さんに反対の声をあげ吊るし上げる。講義に出ていた丸山さんは怒って怒鳴ったそうです。そういう恐怖の時代、東大の中にいてさえも恐怖がある。戦中、丸山さんは、そういう恐怖感を向うにまわして論文を書き続けたんです。その恐怖感は丸山さんの学問にとって大変大きな役割を果たしていると思います。

私は一九四四年に、丸山さんがそうして書いた論文「近世日本思想史における「自然」と「作為」」を読んだ。「作為」は「自然」の流れを断ち切る。丸山さんが読んでいたカントが、自然の流れを垂直に断つものとして倫理の規範を立てたのと響きあうんです。

戦後への持続―同時代批判

それで戦後の初期に書いた論文が「陸羯南」。明治の日本主義者が、海外の思想を排除する昭和の日本主義とはっきり違うことを言った。このエッセイは、戦後同時代の日本の知識人に対する絶望に裏打ちされている。彼らはそれまでまとっていた軍国主義の衣を容易に脱ぎ捨てて新しい衣裳を身につける。また、思い出しの論理。自分の過去から都合のいい所だけを思い出し、屈服したところは括弧に入れちゃう。丸山さんは戦中の気分が持続していた。前の時代の自分を容易に脱ぎ捨てない。都合のいいことだけを思い出すのを下劣だと感じる。そこに丸山さんの特色、メタ・メソッドがある。同時代の進歩的知識人とはかけ離れた存在だった。

丸山さんのメタ・メソッドは重要です。メタ・メソッドなしにメソッドを作ると極めて危険。輸入学問になってしまう。メタ・メソッドだけで押してゆくと、文体は文学にはなるが社会科学からはみだす。丸山さんにおいては、両方が軋みあっている。

この時代に共産党は偉大な非転向だった。それをどう見るかが大問題で、私は「知識人の戦争責任」でそれをとりあげた。すぐに丸山さんは反応して、岩波の『思想』に無署名でエッセイを書いた。無理からぬことだけど共産党も思い出しの論理に陥っている。丸山さんは、政治は結果責任だ、民衆と反戦の協力態勢を構想出来なかった共産党は責任を免れないと言った。私は私の著作に対する真向からの批判だと考えました。突き一本で道場の真ん中にぶっ倒れた感じ。共産党は怒っちゃってそれ以来丸山さんを憎み続ける。

で、丸山さんは戦争中のことを私に知ってほしいと思われた。戦後にお宅を訪ねた時、戦争中に書いた論文を出して来て読んでくれと言われた。一つは麻生義輝『近世日本哲学史』の書評。その中で明治の哲学者大西祝にふれる。大西はカント譲りの垂直の論理。この地上の歴史がどういう風に動いてゆくかを中心に考えるのに対して、何が正しいかという問題は垂直に切り込む。戦争中の哲学は、地上の歴史の流れが中心。丸山さんは、そういう時代に大西祝の立場をはっきり指摘するんです。

もう一つは、『神皇正統記』の批評。戦争中『神皇正統記』を批評するだけでも危ないのに、そこから意外なところを引用する。正統の王・天皇といえども、人民の利益に反すれば当然の報いとして衰える。天皇は万世一系だから日本は絶対に負けないという流れの中でそこを引くのです。引用のしかたで力の段位がわかる。丸山さんは見事です。

マスメディア・民衆・原爆体験

その丸山さんには「同時代報道」—ラジオや映画—への高い評価があった。師事した長谷川如是閑はラジオ文化批判の先駆だった。兄の丸山鉄雄氏は流行歌が好きで、時代批判の替歌まで作った人。NHKに入って風刺番組を作ってヒットしたけれども占領軍の方針にひっかかって降ろされてしまう。そういう背景があるから、映画も中学生の頃からよく見ていて大きな影響を受ける。それは論文にも現れています。カントやヘーゲルだけ、岩波文庫だけ読んでいたのではないんです。

新聞についてもそう。そして新聞に高い理想を求めた。そうすると現在の新聞記者は大体その理想から見て落ちるから駄目。自分も新聞にはほとんど書いていない。竹内好の『北京日記』を読んでも目のつけ所が鋭い。「ジャーナリスト竹内好の誕生」をとらえる。批評家として鋭いのと基準が高くて節度を守る。だから竹内好を論じても限度を越えては踏みこまない。

民衆との関わりにも微妙な問題がある。丸山に対する吉本隆明とは、民衆の取り上げ方、民衆への近づき方が非常に違う。丸山さんは『思想の科学』の創刊の時からの同人です。最初の同人七人の中五人が留学生出身。『思想の科学』は始め一万部出したら全部売れたけど、段々売れなくなる。私が現場の責任者で、困って丸山さんに相談した。丸山さんは、全国各地に執筆者と読者がいる、その人達を中心に支部を作るんだと言う。分権するんです。そんなことを言ったのは同人の中でただ一人です。民衆の中から思想に関心を持って思想について何かを書く人、読む人が出て来るということが、丸山さんの視野に入っている。だから敗戦直後、庶民大学に関心をもって三島まで通っている。民衆っていうとアメリカ譲りの考え方だなんて考えるけれど、その時まで日本を出たことがない丸山からそういう提案が出てる。

丸山さんは軍隊にとられて一等兵の時、広島で原爆にうたれます。原爆経験をもっているのにこのことを黙っている。公開の発言をしない。なぜか。私の類推はこうです。社会党系と共産党系、党派の対立の中に原爆問題は置かれた。マルクス主義には倫理―垂直の論理―が欠けている。だから歴史の言いなりになる、権力の言いなりになる。やっぱり弊害が出て来る。そういう政治的党派の対立に利用されたくないということですね。報道に高きを求めるということと関係があるんです。

メタ・メソッドとメソッドの交錯

丸山さんは、私の仕事はとても危ないと思っていた。『誤解する権利』（一九五九年）って本を書いた時からです。この本を書いたら葉書をくれて、「人を相手とせず天を相手にして下さい」っていう。去年の武田清子さんの講演の中で、武田さんは丸山さんの蔵書の中の『悪霊』なんかへの書き込みを見て引いている。「神なき人間の自由の荒涼たる世界」。天という問題はこれにかかわる。丸山さんが私を戒めて言ったことばで言うと、異端は重要だ。しかし異端であるなら、やがて自分のこの考えが正統になるという異端であるべきだ。ただ、正統に向かって自分は異端でございって横を向くだけではいけないということ。神があろうがなかろうが、そういうことを越えて、ただ自由であるという状態、目的なき意思の危うさ。丸山さんは虚妄だとしてもその虚妄なる戦後民主主義に賭ける。リアリズム一本でゆけばただの荒涼に達するという危険。

大体『誤解する権利』以来、眉唾つきで私に対していたと思うのだけれども、『毎日新聞』かに、私が丸山さんを引用して何か言ったようなことを書いた記者がいた。私に全く関係ないゴシップ・誤伝だけど、丸山さんはそういうのが非常に嫌いだ。すぐ長い弾劾の手紙を書いて

来られた。私は電話をして説明したら、疑問氷解って抗議を撤回した。でも私はあらゆる仕事をほっぽって翌朝一番で東京へ行って丸山さんの家を訪ねた。丸山さんは、もう氷解したのに暮れの大掃除の最中に訪ねて来る君は貴族的で怪しからんという。貴族的で怪しからんというのは丸山さんの偏見で、これはメタ・メソッドの方だ。ともかく家に上げてもらって大掃除の中で雑談して帰った。丸山さんは自分の中におりのように狂った部分を持っていました。だからそれに引っぱられないようにきちっと制御する。メタ・メソッドとメソッドの交錯ね。

私は戦争中の一九四四年にあの「自然」と「作為」の論文を読んで以来、丸山さんの死後も影響を受けて、著述にふれて以来六十年に二年足らず丸山さんの影響下にあります。これで終わり。

まとめ　松沢弘陽
（東京女子大学丸山眞男文庫顧問）

●講師プロフィール●

つるみ・しゅんすけ。一九二二年、東京生まれ。評論家。一九三七年渡米、一九四二年ハーヴァード大学哲学科卒業。一九四五年、丸山眞男、都留重人、武谷三男、渡辺慧、武田清子、鶴見和子各氏とともに、雑誌『思想の科学』を創刊。『鶴見俊輔集』一二巻ほか著書多数。

（『東京女子大学学報』五七八号、二〇〇三年二月号所収）

聴衆の質問に応じる鶴見氏＝中央＝。講演会終了後の前庭にて